

編集後記

＜西沢 護＞

腸疾患の特集も本号を読まれて、いよいよジャングルに入り込んできたと思われる方も多いと思う。というのは、結核の疑診例特集では結核を疑ったけれども組織的に結核という確証がない、しかし総合して考えれば結核であろうという疑診例が多かったが、今回のクローン病疑診例では、臨床的にクローン病を疑ったが、ふたをあけてみたら全く別の疾患が考えられ、クローン病を疑える症例がほとんどなかったことである。

ということは、如何にクローン病を含めた腸の炎症性疾患の本質がはっきりせず臨床、マクロはもちろんのこと、困った時の神様としか考えられなかったミクロが、この範疇に関する限りあまり頼りにならず、臨床(とくにX線診断)、マクロ、ミクロの二人三脚でいかなければだめだろうということである。

八尾先生、武藤先生、若狭先生の総合評を読まれてもそのことがよく理解される。座談会が、また型破りで面白い。疑義百出であいまいに頭の中に入っていた知識が、大分整理されてきたように思われる。

本号を読んで、今まで理由なく、結核でなければクローン病疑いにしておこうという態度が間違っていたことがよく分かるし、確診のつかない炎症性腸疾患の中に未知なものがたくさん含まれていそうで、まだまだジャングルの中に奥深く入り込めば、迷いこんでしまうかもしれないけれど、何か宝ものがみつかるかもしれないと想像するだけでも夢がある。

＜編集＞ 早期胃癌研究会